

まえがき

I dedicate this book to my father.

日本語と英語は系統的な関連性がなく、また言語構造においても大きく異なっているとされている。では日英語は言語構造のどのような点において、どのように異なっているのであろうか。また両言語の間に共通性というものはないのであろうか。本書はこのような問題を、実際の発音を記述した音声構造と、理論的な分析に基づく音韻構造について考察したものである。

本書は合計6つの章から成り立っている。第1章では言語の研究と音声の研究のあらましを述べ、現在の言語研究の中における本書の位置づけを明確にする。音声学概論となる第2章では、発音器官の概要を紹介した上で、人間がどのようにして音声を産出しているか音声産出のメカニズムを解説し、あわせて母音と子音の基本的な特徴について述べてみたい。この章の後半では現代言語学の基本的な概念の一つである「有標性」(markedness)という考え方を具体的に母音と子音について解説し、言語構造の普遍性や自然性を仮定するこの考え方が、日本語の「あいうえお」の秘密を含め、いくつか興味深い疑問の解明に役立つことを論じる。

第3章以降においては、少し理論的な概念を用いて日英語の音韻構造を比較する。まず第3章では、伝統的な音韻分析の基本概念である「音素」という言語単位を紹介し、音素を抽出する方法とそれに基づいてなされた音素分析の結果を解説する。現代言語学を支えている一般化(generalization)という考え方が登場するのもこの章である。

第4章～第6章は一つ一つの音が結合した時に生じる韻律現象(=プロソディー, prosody)を小さな単位から順番に解説する。第4章では子音と母音が結合してできる「音節」という単位と、その単位によく似た「モーラ」という単位の二つを使って、日英語の音声現象がどのように一般化できるかを検討する。この章の後半では、音節構造の有標性について考察を

加えてみる。

続く第5章では、単語レベルの韻律現象である語アクセントを取り上げ、アクセントの定義から語アクセント付与規則の詳細までを論じている。ここでもまた、日英語がどのような共通点と相違点を示すかという問題を、実際の発音と理論的な分析の両方の観点から考察した。最後に「文の発音」と題した第6章では、文(あるいは発話)レベルで観察される文アクセント(文強勢)、リズム、イントネーションという三つの音声現象を、言語類型論の仮説を紹介しながら解説する。日本語と英語がこれらの言語現象についてどのような異同を示し、それらの特徴のどの部分が普遍的で、どの部分が言語個別的と思われるか、最近の研究成果も含めて紹介してみたい。

本書では最後に「結び」として、音声研究の面白さと研究方法を手短かに解説した。卒業論文や修士論文を書き上げるために、どのようにしてテーマを見つけ、どのような手順で研究を進めるか、いくつかヒントを示したつもりである。

本書の各章はそれぞれ独立した現象を分析しており、どの章から読み始めても理解できる内容となっている。各章の冒頭にその章のあらましがまとめてあるので、興味を引かれる章から読んでいただけたらと思う。

本書は言語学や英語学、国語学などを専攻する学部の3、4年生を主な対象として書かれたものである。本書の内容を簡潔な形で知りたい読者には、本書と同じ編者による『日英語対照による英語学概論』(くろしお出版, 1997)を読まれることを奨めたい。本書はこの概説書の第1章「音声学・音韻論」を発展させたもので、より広範囲な音声現象について、豊富で具体的な用例と解説を加えて執筆したものである。また本書を読み終えた読者には、拙著『語形成と音韻構造』(くろしお出版, 1995)と窪菌晴夫・太田聡共著『音韻構造とアクセント』(研究社, 1998)を読んでいただけたら幸いである。本書が日英語の基本的な相違点を中心に解説しているのに対し、この2冊の研究書は日英語の音韻現象をもう少し抽象的な観点から考察し、両言語が示す基本的な共通性を解き明かそうとしたもの

である。本書で論じなかった言語現象の分析も含まれていて、幅広い音韻論のテーマに精通するのも便利であると思われる。

本書の刊行にあたっては、くろしお出版編集部の方田博美氏に大変お世話になり、また原稿の点検については京都大学大学院生の山本武史氏からご尽力をいただいた。最後に、本書を執筆する機会を与えて下さった編者の西光義弘先生にお礼を述べたい。

1998年1月 大阪箕面にて
窪菌晴夫

目次

まえがき	i
第1章 言語の研究と音声の研究	1
1.1 はじめに	2
1.2 言語研究における音声の研究	2
1.3 音声研究の諸分野	5
1.4 音声学と音韻論	7
練習問題	8
Further Reading	8
第2章 音声産出の仕組み	11
2.1 はじめに	12
2.2 発音器官	12
2.3 喉頭の機能	13
2.4 調音	15
2.5 母音と子音	15
2.6 母音	17
2.6.1 母音の記述様式	17
2.6.2 母音の有標性	18
2.7 子音	21
2.7.1 子音の記述様式	21
2.7.2 子音の有標性	26
練習問題	29
Further Reading	29

Further Study (1)	30
第3章 音素と音素体系	31
3.1 音と音素	32
3.2 音素と異音	33
3.3 音素の抽出方法	34
3.3.1 問題	34
3.3.2 ミニマルペアと相補分布	35
3.3.3 音声的類似性	38
3.4 音素体系	40
3.4.1 母音体系	40
3.4.2 子音体系	42
練習問題	44
Further Reading	44
第4章 音節とモーラ	47
4.1 はじめに	48
4.2 音節とは何か	48
4.3 モーラとは何か	53
4.4 モーラ言語と音節言語	58
4.5 英語のモーラ	59
4.6 日本語の音節	61
4.7 音節構造	65
4.7.1 開音節と閉音節	65
4.7.2 頭子音と尾子音	67
4.7.3 子音結合	70
練習問題	72
Further Reading	72
Further Study (2)	74

第5章 語アクセント	75
5.1 はじめに	76
5.2 語アクセントとは何か	76
5.3 高さアクセントと強さアクセント	80
5.4 平板式アクセントと第2強勢	84
5.5 アクセント付与規則	90
5.5.1 自由アクセントと固定アクセント	90
5.5.2 アクセントの弁別機能とアクセント規則	93
5.5.3 形態構造とアクセント型	94
5.5.4 アクセント型の有標性	96
5.5.5 品詞とアクセント型	98
5.5.6 語種とアクセント型	100
5.5.7 音節構造とアクセント型	102
5.6 派生語のアクセント	105
5.7 複合語のアクセント	110
5.7.1 複合語とは何か	110
5.7.2 複合語アクセント規則	112
5.7.3 2種類の複合語	115
練習問題	118
Further Reading	118
Further Study (3)	119
第6章 文の発音	121
6.1 はじめに	122
6.2 文アクセント	122
6.2.1 付属語のアクセント	123
6.2.2 句強勢規則とダウンステップ	125
6.2.3 焦点と文アクセント	128
6.3 リズム	134
6.3.1 リズムとは何か	134

6.3.2	音節拍リズムと強勢拍リズム	136
6.3.3	日本語の音節拍リズム	137
6.3.4	英語の強勢拍リズム	138
6.4	イントネーション	143
6.4.1	語ピッチ言語とイントネーション言語	144
6.4.2	語アクセントとイントネーション	146
	練習問題	149
	Further Reading	149
Further Study (4)		150
結び		153
注		157
引用文献		161
索引		165

第1章

言語の研究と音声の研究

→ I am now studying phonetics and phonology at a university in Japan.

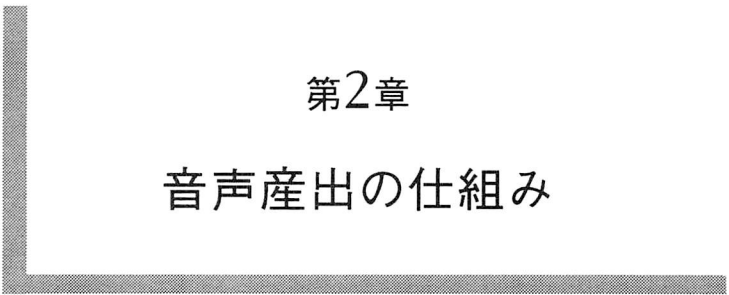
1.1 はじめに

人間が行う意思伝達(コミュニケーション)は、主として音声と文字という二つの手段を用いて行われる。音声と文字以外でも、目などの顔の一部(あるいは全部)を用いたり、手足などのジェスチャーを使って意思や感情を表出することも可能であるが、この種の「言葉を使わない意思伝達」(nonverbal communication)は、伝達量などの面で音声や文字を用いた意思伝達ほど効果的なものではない。

音声と文字の二つの媒体の中では、前者の方が後者より重要な手段であると考えられる。このことは、文字を持たない文化は存在しても音声を持たない文化は存在しないという事実や、文字の読み書きができない人であっても音声による意思伝達には不自由しないという事実から理解できる。では音声による意思伝達(音声コミュニケーション)は具体的にどのような過程を経て達成されるのであろうか。また言語学者は、この一連の過程をどのように分類し、またどのような視点から研究しているのであろうか。さらには、本書が目的としている音声の研究には具体的にどのような研究課題があり、音声研究者はそれらの課題にどのように取り組んでいるのであろうか。この章では、これらの問題を中心に据えて、言語研究と音声研究の枠組みと研究内容を紹介することにする。

1.2 言語研究における音声の研究

音声による意思伝達の過程は概略(1)に示すように、意味(meaning)を形・形式(form)に換える過程である。この中で、話者(speaker)はまず頭の中に相手に伝えるメッセージ(意味)を作りだし、その意味を記号化(encode)して相手に伝えようとする。この記号化の過程は、(i)メッセージを表すために適切な語を選択し、(ii)選択した語を並べて適切な文を作り出し、(iii)その文に適切な発音(音声)を与える、という三つの部分から成り立っている。このようにして音声という形に変換されたものが



第2章
音声産出の仕組み

ヨーロッパの諸言語でも中国語でも
お父さんはパパ、お母さんはママという。

2.1 はじめに

人間は息をして生きている。生きるためには息をすることが必要であり、息が止まることは生きることが終わることを意味している。しかし人間が息をするのはただ生きるためだけではない。息をするという活動を利用して、音声を産出し、音声による意思伝達を行っている。では、人間は具体的にどのようにして音声を作り出しているのだろうか。
喉頭癌こうとうがんで声帯を摘出したり、あるいは交通事故で頬に穴が空いてしまったりすると、自然な音声が出なくなり、意思伝達に大きな障害が生じる。これはなぜだろうか。

またヨーロッパの諸言語でも中国語でも、お父さんのことを「パパ」と呼び、お母さんを「ママ」と呼ぶ。系統の異なる複数の言語が親族名称に同じ発音を持っているのは偶然なのだろうか。それとも、これらの一致を生み出す何かを子供は持って生まれてくるのだろうか。この問題を突き詰めていくと、なぜ日本語が「あいうえお」という5つの母音を持ち、なぜこの順番に並べて発音しているのか、という問題にたどり着く。この章では、これらの問題を糸口に音声産出の仕組みを考えてみたい。

2.2 発音器官

人間が音声を産出する活動の出発点は、肺などの呼吸器を使った呼吸活動にある。呼吸は、空気を肺に吸い込む「吸気」と、それを肺から排出する「呼気」の二つの過程から成り立っており、このうち呼吸活動に特に必要なものは、空気中の酸素を吸い込む「吸気」の過程である。「吸気」とペアを成しているのが体内の二酸化炭素を体外に排出する「呼気」の運動であり、音声はこの運動によって作り出される空気の流れをうまく利用して産出される。この意味において、音声産出は二酸化炭素を含んだ空気(不要品)のリサイクル活動と言うこともできる。

音声産出に必要な空気の流れは、肺から気管を通して口(=口腔)コウコ

第3章

音素と音素体系

3.1 音と音素

日本語は5つの母音を持つ言語とされている。5母音という短母音の数は世界中の言語の中でも標準的なものようである。アラビア語のように[a, i, u]の三つの母音しか持たない言語も存在し、また2母音しか持たない言語も存在すると言う(渡部 1996)。その一方では、英語やスウェーデン語のように日本語の倍以上の数の母音を有する言語も存在している。「日本語は5母音」というのは、日本語(話者)が前章の図2に示した母音空間を5分割して使っているという意味であり、英語(話者)より分割の数が少ないという意味である。母音体系の違いとは、このように母音空間の区切り方の違いである。ちなみに、生まれたばかりの子供に与えられているのは全体の枠としての母音空間であり、この母音空間をどのように分割するかは生後6ヶ月くらいまでに決定されると言われている(日本音響学会編 1996)。つまり日本人の子供でもたとえば20個の母音を聞き分ける能力を持って生まれているのであり、生後、日本語のデータに触れることによってこの弁別能力を徐々に失い、最終的に日本語に合った5分割体系を「獲得」するのである。

日本語に5つしか母音がないということは、日本語話者が5つしか母音を発音できない、ということの意味しているのではない。個々の発音としての母音の数は無数であって、同じ「イ」という音でも「エ」に近い「イ」もあれば「ウ」に近い「イ」まで、多様な音が存在する。同じ「カイ(貝)」という語を発音しても、Aさんの発音とBさんの発音では物理的特性が微妙に異なっている。また同じ話者でも、単語の中でどの位置に現れるか、前後にくる子音がどのような種類のものであるかなどの要因によって、同じ「イ」という母音でも実際の特性は異なってくる。「カイ(貝)」の「イ」と「イカ」の「イ」では特性が異なってくるのである。さらには同じ話者が同じ語(たとえば「カイ」という語)を発音する場合でも、1回目の発音と2回目の発音では「イ」の特性が微妙に異なってもおかしくない。このように物理的特性を詳細に調べてみると、100%同じ特性を持った音が